

(TOKYO 次代の案内人) パリ・パラ挑戦へ熱い夏 思いやる心、子どもに伝え ブラインドサッカー日本代表キャプテン 川村怜さん

2023/7/19付 | 日本経済新聞 朝刊

ブラインドサッカーは5人制の障害者スポーツ。ボールの音や仲間の声を頼りに全盲の選手が躍動する。アクサ生命保険の川村怜さん（34）は日本代表の頼れるキャプテン。2年前の東京パラリンピックで盛り上がった競技の魅力を広めようと地域の交流を育む。



「一つ先の、新リーグはじまる」——。ブラインドサッカーのトップリーグが7月22日に開幕する。会場は品川区立総合体育館。川村さんの所属するパペレシアル品川が2年目のシーズンに臨む。4年前に誕生したチームは2023年2月の日本選手権で初優勝し、地元の期待は大きい。チームの若手が商店街の人たちと一緒に約700枚のチラシを配り来場を呼びかけた。

細かなタッチのドリブルから得点を決める。川村さんのプレーは試合の華だ。まるで相手やゴールの位置が見えているかのようだが、頭の中で一連の動きがビジュアル化されているという。東京パラでは、ゴール前にふわりと浮かしたパスを出して「奇跡のシュート」をアシストした。

大学に入って競技を始めた。ほかの障害者スポーツにない魅力に引かれたという。コートに立つ5人の選手のうちゴールキーパーは晴眼者だ。「目の見えない僕たちが本気で打ったシュートを、目の見えるキーパーが本気で止めにくる」。一度はあきらめたサッカーの世界で「パラリンピック出場」の目標が生まれた。

代表歴は丸10年。「自分しかいない」とキャプテンを引き受けて7年がたつ。「特技は地道に継続すること」「自分を一言で表すと求道者」。ぶれない姿勢は地域との交流でも生きる。

「スポ育」は日本ブラインドサッカー協会（東京・新宿）作成の体験型プログラム。アイマスクを着けた子どもたちがサッカーに挑戦する。「障害者の気持ちを理解し、人を思いやることの大切さを伝えたい」と川村さん。アクサ生命の広報活動の一環で「多様性」をテーマに経営者の前で講演する機会も増えた。

23年は「熱い夏」だ。8月に英国で開かれる世界選手権で24年のパリ・パラリンピックの最後の切符を争う。東京パラで届かなかったメダルを手にして、子どもたちに格好良いところを見せたいという。「自分が歴史をつくる」と川村さん。スタッフが手作りの兜（かぶと）を用意した。米大リーグ、大谷翔平選手のパフォーマンスにあやかり、ゴールした選手がかぶる。「背番号10」のキャプテンの活躍に期待したい。

（山本啓一）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.